

短著

動物との触れ合いが幼児期後期の子どもに及ぼす心理的効果

三上ふみ子*・一戸とも子

青森中央学院大学看護学部看護学科

(平成 28 年 12 月 1 日受付 / 平成 29 年 2 月 6 日受理)

Psychological effect of contact with animals on children in late childhood

MIKAMI Fumiko*, ICHINOHE Tomoko

Faculty of Nursing, Department of Nursing, Aomori Chuo Gakuin University

(Received December 1, 2016/Accepted February 6, 2017)

Abstract : The purpose of this study is to elucidate the changes in salivary amylase activity and children's facial expressions and demeanor to examine the psychological effect that contact with animals has on children in late childhood. Twelve children in late childhood answered a questionnaire about impressions of animals in daily life, underwent behavioral analysis in settings where they came into contact with animals (rabbits), and underwent salivary amylase activity measurements before and after contact with animals. The results revealed that children had a positive impression of animals in daily life, and that "attachment" was the most common observation in the behavioral analysis. However, salivary amylase activity did not change significantly between measurements taken before and after contact with animals. The psychological effect of contact with animals was therefore unclear from changes in salivary amylase activity. However, the positive and active relationships that children had with animals, such as "attachment" and "acceptance," observed in the behavioral analysis suggested that contact with animals does have a psychological effect on children.

Key words : Contact with animals, Behavioral analysis, Salivary amylase activity change, Late childhood

J. Anim. Edu. Ther. 8: 1-7, 2017

I. はじめに

動物との触れ合いにより、子どもによい効果があることは様々な分野で研究されている。

子どもへの心理的効果については、動物との接触によって、ストレスが低下し、心の安定が得られること(須田 2009)や動物飼育が幼児の情緒発達に良好な影響を及ぼすこと(桜井ら 1993)などが報告されている。心理的効果を検証するため、聞き取り調査、ビデオ撮影、子どもの行動観察などが行われているが、子どもの場合、客観的な評価をしているものは少ない。その要因として、拒否や抵抗感、違和感などが生じる可能性に加え、保護者の同意が得にくい場合があるこ

とが挙げられている(柿沼ら 2013)。このような要因がある中で、子どもが動物と触れ合うことの心理的効果を客観的に検証するために、alpha (α) アミラーゼ(以下、唾液アミラーゼ)活性変化を用いることを試みた。唾液アミラーゼ活性は、非侵襲的ストレスマーカーであるが、快適と不快を判別できる可能性も示されている(山口ら 2001)。子どもを対象に唾液アミラーゼ活性を用いた研究では、医療処置に伴う子どものストレス評価(下村ら 2008, 竹田ら 2006)や重症心身障害児(者)に対する快ストレスの評価(小玉ら 2008)が報告されており、唾液アミラーゼ活性変化が客観的評価として活用できると考えた。さらに、

*連絡先 : f-mikami@aomoricgu.ac.jp (〒030-0132 青森県青森市大字横内字神田 12 番地)

子どものしぐさや表情に焦点をあてて心理的・物理的意味に基づき分類された対動物カテゴリー（坂本1987）を用いて、子どもの表情や態度を観察することで、心理的効果を検証する。

以上のことより、本研究では、幼児期後期の子どもを対象に、唾液アミラーゼ活性変化及び子どもの表情や態度を分析し、子どもが動物と触れ合うことの心理的効果を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象者

A市内でB動物広場に遠足を行っている2保育園の施設長に本研究の趣旨について説明し協力を得た。この2保育園に通う4～6歳の保護者に、施設職員を通して、本研究の趣旨・目的・倫理的配慮等及び唾液採取と遠足時のビデオ撮影の協力依頼を記載した依頼文と質問紙を配布した。そのうち、本研究への参加に保護者から同意を得られた子ども12名である。

2. 研究期間

平成21年5月～平成22年6月。

3. 調査内容

(1) 質問紙調査

質問紙では、子どもの年齢と性別、自宅でのペットの飼育状況、子どもが抱く日常における動物の印象について調査した。子どもが抱く日常における動物の印象については、保護者の判断ではなく、保護者が子どもに動物をどう思うのかを尋ねてから回答するよう依頼した。質問紙は保護者に記載してもらった。

ペットの飼育状況については、ペットの飼育の有無、ペットの種類、飼育期間、飼育理由、子どものペットへの関わり方を回答してもらった。飼育理由については、命の尊さを学ぶ、思いやり・優しさを育てる、子どもが希望した、責任感を育む、子どもに楽しみを与える、その他の6項目から主なものを2つ選択してもらった。

日常における動物の印象については、山田(2000)の「SD法による動物の印象測定質問紙」に用いた形容詞対を参考にした。質問紙を参考にすることに対しては、作成者の了解を得た。山田の質問紙は項目数が多いため、子どもが回答しやすく、かつ保護者が質問しやすいよう10項目を抽出した。質問項目は、「怖いー優しい」「触れてみたいー触れたくない」「親しみやすいー親しみにくい」「安心するー不安である」「おとなしいー活発である」「攻撃的でないー攻撃的である」「臭いー臭くない」「きれいなー汚い」「やわらかいーかたい」「強いー弱い」とした。評定は5段階で

あり、1.強く思う2.そう思う3.どちらでもない4.そう思う5.強く思うとした。

(2) 動物と触れ合う場面でのビデオ撮影

2施設によるB動物広場の遠足に同行し、ふれあいコーナーで子どもがウサギと触れ合う場面をビデオ撮影した。ふれあいコーナーは、面積15×17m²で常時ウサギが4～5羽程おり、自由に触れ合うことができる。コーナーの中は、土管や餌場が置かれており、ウサギが移動している場所である。

研究協力を得られた子どもには、個別にビデオの映像分析できるように、胸に愛称の名札をつけた。撮影方法は、子どもの行動をビデオ撮影が可能と判断した2～3名ずつ、ふれあいコーナーに入ってもらい、子どもがウサギに接してから離れるまでの行動を撮影した。また、次に触れ合ってもらう子どもにはふれあいコーナーの入り口にて待機してもらった。ウサギと触れ合っている具体的な行動を把握するため、しぐさ・表情に焦点をあてること、録画されていることを意識しないよう、子どもと距離を置くことに留意した。

(3) 唾液採取

唾液は唾液採取用チューブ（アシスト社サリキッズ）で採取した。サリキッズは小児を対象とした安全性を最優先した誤嚥防止の為に保持紐付きスポンジである。採取は子どもにスポンジを約40～90秒口の中に含んでもらい、唾液を染み込ませた。子どもがスポンジを含んでいる間は、常に目を離さないよう安全に注意した。唾液を染み込ませた後、スポンジを取り出し、回収用チューブに入れ、遠心分離後凍結保存した。

採取回数は遠足において、動物と触れ合う直前、動物と触れ合った直後の2回採取した。また、動物と接していない状態での日内変動と比較するために、筆者が1日4回（登園直後・昼食前・昼寝前・降園前）、2日間唾液を採取した。採取にあたっては、食後30分以内にならないように留意した。

4. 分析方法

統計解析には、統計ソフト『SPSS14.0J for Windows』を使用し、5%未満を有意水準とした。

(1) 日常における動物の印象について

日常における動物の印象について、10項目の各平均値を算出した。日常における動物の印象とペットの飼育の有無についての比較は、Mann-Whitney検定を用いた。

(2) ビデオ撮影による行動分析

坂本(1987)の対動物行動カテゴリー『攻撃』3項目、『拒否』8項目、『無関心』3項目、『受容』4項目、『親和』8項目、『愛着』6項目の全32項目をチェッ

クリストとして用いた。対動物行動カテゴリーの定義・行動は表1に示す。筆者ら2名でビデオを視聴、子ども1名ごとに触れ合っている行動を15秒間隔でチェックした。チェック後、2名の間で子どもの行動が一致しているか確認し、一致していない場合にはビデオを視聴し協議を繰り返し行った。15秒間に現れた行動それぞれを1行動とし、全行動と比較して行動出現率を算出した。

(3) 唾液アミラーゼ活性変化

唾液アミラーゼ活性はファデバスアミラーゼテストを用いて定量的に測定した。日内変動の唾液アミラーゼ活性変化は反復測定による分散分析、動物と触れ合う前後の唾液アミラーゼ活性の比較はWilcoxonの符号付順位検定を用いた。

5. 倫理的配慮

本研究はC大学大学院医学研究科倫理委員会の承認(2008-152)を得て実施した。2保育園の施設長

に研究協力を依頼し、同意を得た。子どもとその保護者には、調査用紙に本研究の趣旨・目的、記名式で行うがプライバシーを保護すること、協力しない場合でも不利益を被らないこと、参加同意の自由と途中での参加撤回の自由、結果の公表については対象者を特定できないようにすること、唾液採取時の安全の確保等を文書で説明し書面にて同意を得た。遠足の同行には保育園の施設長に、B動物広場の利用については施設責任者に許可を得た。動物に対しては、過度な負担にならないよう、確認しながら行った。

Ⅲ. 結果

1. 対象者(表2)

対象者は男児8名、女児4名、平均年齢4.4±0.7歳であった。ペットを自宅で飼育している子どもは3名であった。ペットの種類は犬・金魚・熱帯魚が2名、金魚・熱帯魚が1名であった。ペットの飼育理由として、「思いやり・優しさを育てる」「子どもに楽

表1 対動物行動カテゴリー(坂本1987)

行動型	定義	行動()内は項目数
攻撃	動物に対して積極的に否定し、攻撃を加え、排除しようとする行動。	石や物を投げる。おこりごえ。罵声をあげる。(3)
拒否	動物に対するのを否定し、自分と動物との関係を積極的に断ち切ろうと拒否する行動。	目をおおう。目や顔をふせる。泣く。耳をふさぐ。かくれる。イヤイヤをする。後ずさり。こわがりさげ。(8)
無関心	動物に関して関心を向けず、動物とのかかわりを消極的に回避する行動や動物とのかかわりには関心のない行動。	他の方向をみる。まわりをみる。ゆびしゃぶり。(3)
受容	動物との関係を肯定的に受けとり、動物のうごきをそのまま受容する行動。	凝視。後追い見。のぞきこみ。ぼーっとみる。(4)
親和	動物との関係を肯定的に受けとり、積極的に動物とかかわろうとする行動。接触行動は含まれない。	笑う。手をうつ。指さす。エサをあげる。しぐさのまね。なきごえのまね。名称をよぶ。おいかける。(8)
愛着	動物との関係を最も肯定的・積極的にもち、動物との身体的接触を伴う。	つかむ。さわる。なでる。もちあげる。つつく。だっこする。(6)

表2 対象者の概要

性別	年齢	ペットの有無	ペットの種類	飼育期間	飼育理由	ペットの関わり方
1	男	4	無			
2	男	4	無			
3	女	4	無			
4	女	4	無			
5	男	4	有 犬、金魚・熱帯魚	4~5年	思いやり・優しさを育てる 子どもに楽しさを与える	ペットと遊ぶ
6	女	5	無			
7	男	5	無			
8	男	4	無			
9	男	6	無			
10	男	4	無			
11	女	5	有 犬、金魚・熱帯魚	5年以上	全項目回答	小屋の掃除 ペットと遊ぶ
12	男	4	有 金魚・熱帯魚	1年未満	子どもに楽しさを与える 命の尊さを学ぶ	えさやり その他

しさを与える」「命の尊さを学ぶ」であった。ペットとのかかわりについては、えさやり1名、小屋の掃除・ペットと遊ぶ1名、ペットと遊ぶ1名であった。

2. 日常における動物の印象

日常における動物の印象について、質問項目別に12名の平均値を子どもの評定値とした。「怖いー優しい」(4.17 ± 0.83), 「触れてみたいー触れたくない」(2.42 ± 1.62), 「親しみやすいー親しみにくい」(2.25 ± 1.22), 「安心するー不安である」(2.08 ± 0.90), 「おとなしいー活発である」(2.83 ± 1.27), 「攻撃的でないー攻撃的である」(1.92 ± 0.51), 「臭いー臭くない」(3.75 ± 1.36), 「きれいなー汚い」(2.42 ± 1.25), 「やわらかいーかたい」(1.75 ± 0.9), 「強いー弱い」(4.08 ± 0.90) であった。

ペットの飼育の有無で比較したところ、「親しみやすいー親しみにくい」, 「安心するー不安である」, 「攻撃的でないー攻撃的である」, 「臭いー臭くない」, 「きれいなー汚い」, 「やわらかいーかたい」の6項目において、有意差がみられた。(p<.05 ~ .01) (図1)。

3. 動物との触れ合いにおける行動出現率 (図2)

動物と触れ合っている時間は1人当たり1.50分~5.25分で、平均3.54 ± 1.12分であった。動物と触れ合っている時の行動は1人当たり10~29行動、全体で252行動であった。

対象者ごとの行動出現率をみると、『攻撃』0.00%, 『拒否』0.00~10.53%, 『無関心』0.00~11.11%, 『受容』11.54~60.00%, 『親和』0.00~23.07%, 『愛着』26.32~75.00%であった。

4. 唾液アミラーゼ活性変化

(1) 日内変動での唾液アミラーゼ活性変化

通常の通園日に測定した唾液アミラーゼ活性の平均値は、登園直後 $10.19 \times 10^3 \pm 5.06 \times 10^3$ U/L, 昼食

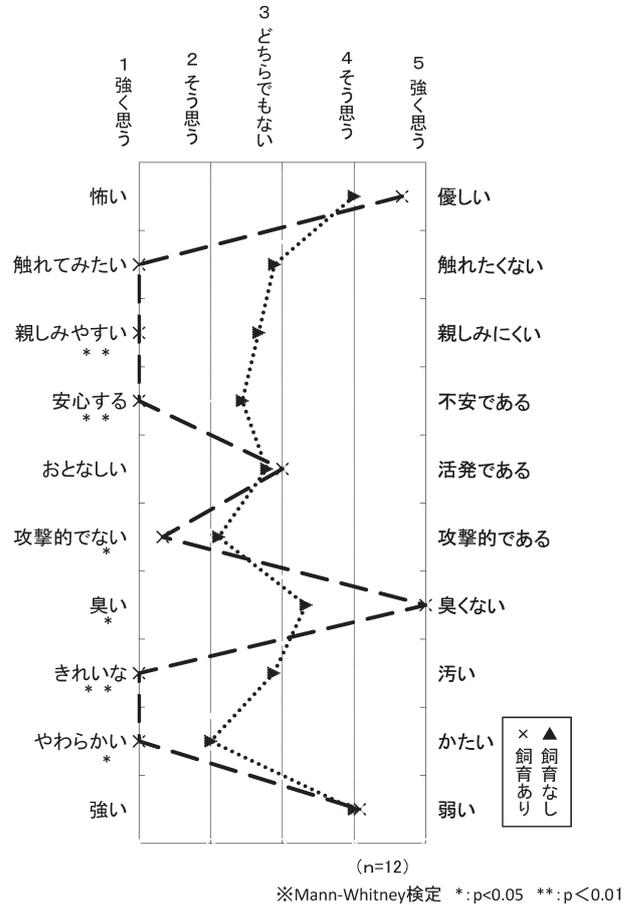


図1 日常における動物の印象について

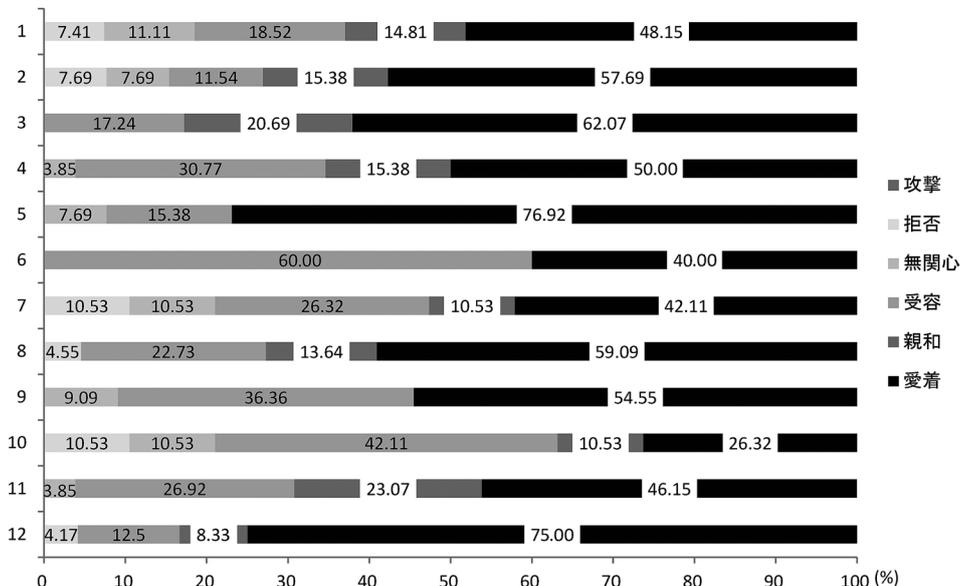


図2 動物との触れ合いにおける行動出現率

前 $10.40 \times 10^3 \pm 6.12 \times 10^3 \text{U/L}$ ，昼寝前 $12.50 \times 10^3 \pm 5.07 \times 10^3 \text{U/L}$ ，降園前 $11.36 \times 10^3 \pm 6.29 \times 10^3 \text{U/L}$ であった。これらの4回の測定時間において、唾液アミラーゼ活性変化に有意差はなかった。

(2) 動物と触れ合う前後のアミラーゼ活性変化(図3)

動物と触れ合う前の唾液アミラーゼ活性の平均値は $13.08 \times 10^3 \pm 7.04 \times 10^3 \text{U/L}$ ，触れ合った後は $15.13 \times 10^3 \pm 11.49 \times 10^3 \text{U/L}$ であった。触れ合った後の唾液アミラーゼ活性が減少したもの4名，上昇したもの8名であった。触れ合った前後において有意差はなかった。

IV. 考察

1. 対象者の概要

今回の調査では、自宅でペットを飼育している子どもは12名中3名であった。これは、日本のペット飼育率と同様の傾向であった。ペットの飼育には、住宅環境や家族構成、ペットを飼育する時間などを考慮する必要がある。都市部で生活するようになると、多くの動物などとの接触体験ができない子どもが増加する(須田 2009) という指摘があるように、子どもが動物と触れ合う機会は限られてくるといえる。

ペットを飼育する理由として、「子どもに楽しさを与える」「思いやり・優しさを育てる」「命の尊さを学ぶ」と回答している。子どもがペットを飼育することで、心豊かに育っているや家族とのコミュニケーションが豊かになったなどの効用があり(日本ペットフード協会 2015)，子どもへの様々な良い影響を期待し、ペットを飼育していると考えられる。

日常における動物の印象については、全体として、「優しい」「攻撃的でない」「やわらかい」というポジティブな印象を持っていることが明らかとなった。これは、間接的にではあっても、子どもが日常的にテレビで動物を見ていること、動物を題材とした絵本やぬ

いぐるみを読んだり、触っていること等が関係していると考えられる。また、自宅でペットを飼育している子どもの方が、よりポジティブな印象を持っていた。ペットの飼育経験があると、動物を好ましく感じる傾向がある(Levinson 2002)と言われているように、飼育しているペットと遊ぶことや小屋の掃除などを通して関わりを多く持っていることが、動物に対して好意的な感情を持つことにつながっているといえる。

日内変動での唾液アミラーゼ活性変化では、有意差がみられなかった。小花和ら(2008)の先行研究では、登園直後が最も高く、通園までの身体活動あるいは朝食摂取が影響した可能性を指摘している。本研究では、登園前に唾液アミラーゼ活性変化を有意に変動させる活動がなかったと推察した。また、保育園は毎日のように通い慣れている環境であり、唾液アミラーゼ活性変化が有意に変動しない要因ではないかと考える。

2. 動物との触れ合いによる心理的効果

坂本(1987)は、『愛着』を動物との関係を最も肯定的・積極的にもつこと、『受容』を動物との関係を肯定的に受けとっていると定義している。本研究の行動分析では、『愛着』『受容』が多くみられ、『攻撃』の行動はみられなかった。また、日常における動物の印象でも、「優しい」「攻撃的でない」「やわらかい」などポジティブな印象を持っていた。このことから、子どもが動物との触れ合いを肯定的・積極的に捉えていることが明らかとなり、その印象が、『愛着』『受容』という行動につながっていると考えられる。

『愛着』の中には、[さわる][なでる][だっこする]などがあり、特に[さわる]という行動が30.16%と他の行動と比べて多かった。これは、好奇心が旺盛である幼児期の特徴でもあり、動物への興味が高まっていることによる行動であるといえる。ま

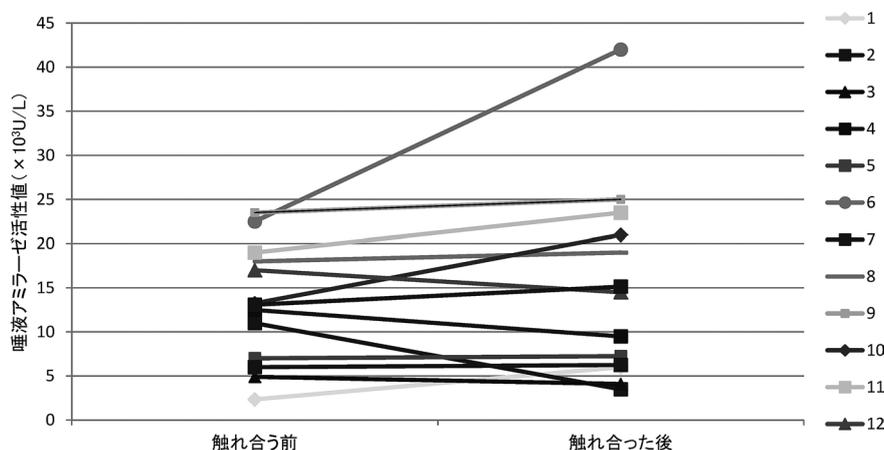


図3 動物と触れ合う前後での唾液アミラーゼ活性変化

た、一般的な動物園と比べて、触れる動物園の子どもたちは、動物に対して、見る、触る、話をする時間が多い (Kidd *et al*, 1995) という先行研究と一致していた。動物を触ることでの触覚への刺激は、視覚刺激より強く (林 1999), 安心感を得ることができる (Levinson 2002)。本研究でも、動物に実際に触れてみたことで、動物自体の暖かさや柔らかさを感じ、『愛着』や『受容』という行動につながっていたと考える。子どもと動物玩具との触れ合いの効果を報告している研究 (伊藤ら 2009, 松村ら 2004) もあるが、実際に触れることができる動物では、母親との愛着に似た感覚が生まれているといえる。横山 (1996) も、子どもの場合、母親のような安心感を得ることができるとしている。動物と実際に触れ合うことは、生まれた時から母親に触れ、守られてきた気持ちと重なり、心理的にプラスの影響を与えることにつながったのではないかと考える。唾液アミラーゼ活性変化では、動物と触れ合う前後において、触れ合った後の唾液アミラーゼ活性値が減少したものの4名、上昇したものの8名であり、有意差はみられなかった。唾液アミラーゼ活性値が上昇した要因として、精神の高揚を指摘している報告 (太湯ら 2008) もあり、遠足という精神的興奮や動物に触るという体験が影響していたものと考えられる。しかし、行動分析をみると、肯定的・積極的行動とされる『愛着』や『受容』が多かった。イルカ介在活動の自閉症児の事例では、日常とは乖離した体験であってもリラックスした表情やイルカに盛んに手を伸ばす行動がみられた報告 (加田ら 2009) もある。また Melson (2007) は、子どもは動物を自身の感覚の発達における教材として動物に近づくと述べていることから、唾液アミラーゼ活性値を有意に低下させる快の刺激でなかったにせよ、子ども自身が動物に触りたい、動物を見てみたいという行動につながっていたと考える。

以上のことから、唾液アミラーゼ活性変化では、子どもと動物との触れ合いの心理的效果は明らかとならなかったが、行動分析からは肯定的な行動がみられ、動物と触れ合うことの心理的效果はあるものと示唆された。

今後の課題として、本研究では、対象の人数が少なく、調査場所の選定や動物と触れ合う時の唾液採取回数など研究方法を工夫する必要がある。今後さらに事例を増やしデータを積み重ねることで、動物との触れ合いを客観的に評価できる方法を検討していきたい。

V. 結論

幼児期後期の子どもを対象に動物と触れ合うことの心理的效果について、唾液アミラーゼ活性変化、子ど

もの表情や態度から検証した。その結果、行動分析では『愛着』『受容』が多く見られたが、動物と触れ合った前後の唾液アミラーゼ活性変化では有意差がなかった。今回の研究では、唾液アミラーゼ活性変化による心理的效果は明らかとならなかったが、行動分析では肯定的・積極的な行動が見られ、動物と触れ合うことの心理的效果はあるものと示唆された。

謝辞

本研究にあたり、ご協力いただきました保育園のお子様とご家族、諸施設の関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は、第39回日本看護研究学会学術集会 (平成25年8月:秋田市) で発表した。

引用文献

- 太湯好子, 小林春男, 永瀬仁美, 生長豊健. 2008. 認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性. 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 353-361.
- 林 良博. 1999. 検証アニマルセラピー ペットで心とからだ癒せるか. pp.51-52, 講談社, 東京.
- 伊藤恵美, 熊坂隆行, 大石千里. 2009. 入院中の幼児におけるイヌ型福祉玩具とのふれあいの効果に関する研究. 日本小児看護学会誌, 18 (1), 45-50.
- 加田陽子, 石田雅人, 高岡 忍. 2009. 自閉症児を対象としたイルカ介在活動の効果—香川県さぬき市での実践事例から—. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 57 (2), 39-52.
- 柿沼美紀, 野中香緒里, 野瀬 出. 2013. 乗馬会に参加した子どもの絵は乗馬体験を反映しているか—定型発達児, 自閉症児, 知的障害児の比較から考える描画分析の可能性—. 動物介在教育・療法学雑誌, 4, 1-8.
- Kidd A, Kidd R, Zasloff R. 1995. Developmental factors in positive attitudes toward zoo animals. *Psychological Reports*, 76, 71-81.
- 小玉武志, 中村裕二, 堀本佳誉, 須鎌康介, 高田千春, 高橋奈津美, 竹内孝子, 千葉峻三, 中島そのみ, 仙石泰仁. 2008. 重症心身障害児 (者) に対する唾液アミラーゼ活性値評価の試み (第1報) —快ストレスとの関係—. 日本重症心身障害学会誌, 33 (1), 113-119.
- Levinson B, Mallon G. 2002. 子どものためのアニマルセラピー, 松田和義・東豊監訳, pp.145, 日本評論社, 東京.
- 松村典子, 阿部直子, 堀口重貴代. 2004. 小児病院におけるペット型ロボット介在活動からの報告. 日本看護学会論文集 小児看護, 35, 113-115.
- Melson G. 2007. 動物と子どもの関係学—発達心理からみた動物の意味, 横山章光・加藤謙介訳, pp.46, ビイグ・ネット・プレス, 東京.
- 日本ペットフード協会. 2015. ペット飼育の効用. <http://www.petfood.or.jp/data/chart2015/11.html> (2016年10月閲覧)
- 小花和 Wright 尚子, 河合優年, 杉本五十洋, 山本初美. 2008. 幼児の唾液中 α アミラーゼの日内変動と個人差.

- 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1030.
- 坂本道子. 1987. 対動物行動に関する基礎的研究—対動物行動カテゴリーにみられる動物園動物およびサルに対する人間の行動—. 日本女子大学教育学会誌人間研究, 23, 132-149.
- 桜井富士朗, 杉本恵子, 長嶋正和, 川原和彦, 浅見千鶴子, 林洋一, 森永良子, 鹿野りえ, 内野富弥. 1993. 動物飼育が幼児の情緒発達に及ぼす影響. どうぶつと人, 2, 7-11.
- 下村有紀子, 福島 敬, 中嶋玲子, 中尾朋平, 工藤寿子, 田村恵美, 金澤重乃, 山口昌樹, 竹田一則. 2008. 小児がん患児における医療処置に伴うストレスと唾液アマラーゼ活性値との関連に関する検討. 小児がん 45 巻プログラム・総会号, 383.
- 須田沖夫. 2009. 子どもと動物とのふれあい. 小児科臨床, 62(4), 597-613.
- 竹田一則, 大西美恵子, 山口昌樹, 竹谷俊樹. 2006. 重症心身障害児(者)における医療処置に伴う distress と唾液アマラーゼ活性値との関連に関する検討. 日本重症心身障害学会誌, 31 (1), 85-92.
- 山田弘司. 2000. SD 法による動物の印象測定質問紙の作成. 感情心理学研究, 8 (1), 39-40.
- 山口昌樹, 金森貴裕, 金丸正史, 水野康文, 吉田 博. 2001. 唾液アマラーゼ活性はストレス推定の指標になり得るか. 医用医学と生体工学, 39 (3), 234-239.
- 横山章光. 1996. アニマル・セラピーとは何か, pp.95, 日本放送出版協会, 東京.

動物との触れ合いが幼児期後期の子どもに及ぼす心理的効果

三上ふみ子・一戸とも子

青森中央学院大学看護学部看護学科

(平成 28 年 12 月 1 日受付 / 平成 29 年 2 月 6 日受理)

要約：本研究の目的は、動物との触れ合いによる幼児期後期の子どもへの心理的効果について、唾液アマラーゼ活性変化及び子どもの表情や態度から明らかにすることである。幼児期後期の 12 名の子どもを対象とし、日常における動物の印象についての質問紙調査、動物（ウサギ）と触れ合う場面の行動分析、動物と触れ合う前後で唾液アマラーゼ活性を測定した。その結果、子どもは日常における動物についてポジティブな印象を持っており、行動分析では「愛着」が最も多かった。唾液アマラーゼ活性変化については、動物と触れ合う前後で有意差がなかった。動物との触れ合いによる心理的効果は、唾液アマラーゼ活性変化では明らかとならなかった。しかし、行動分析では、「愛着」「受容」という肯定的な関係を持っていたことから、動物と触れ合うことによる心理的効果があることが示唆された。

キーワード：動物との触れ合い, 行動分析, 唾液アマラーゼ活性, 幼児期後期

J. Anim. Edu. Ther. 8: 1-7, 2017
